# 核兵器廃絶研究センター 開設記念シンポジウム（2012年4月18日）報告書

核兵器のない世界を目指して —— 長崎から世界へ

Research Center for Nuclear Weapons Abolition, Nagasaki University

RECNA

RECNA
長崎大学核兵器廃絶研究センター

# RECNA とは

## 設立の趣旨

長崎大学は世界唯一の被ばく医科大学の歴史を継承する大学であり、「核なき世界の実現」は大学にとって枢要な課題である。長崎大学核兵器廃絶研究センターは、被ばく地に存在し、被ばくを実体験したアカデミアの共同教育研究施設であり、次の目的をもつ活動拠点として設立される。

①ヒロシマ・ナガサキを現在の世界の潮流の中で新たに位置づけ、学問的調査・分析を通して核兵器廃絶に向けた情報や提言をさまざまな角度から世界に発信する。

②その過程や成果を活かして大学教育に貢献する。核兵器廃絶研究センターは、核兵器廃絶を願う一般市民のために地域に開かれたシンクタンクとして、長崎県や長崎市などとも連携を図りながら運営される。

### 教員

| | |
|---|---|
| センター長（教授） | 梅林 宏道 |
| 副センター長（教授） | 広瀬　訓 |
| 教授 | 三根 眞理子 |
| 准教授 | 中村 桂子 |
| 客員教員 | 朝長 万左男、西田　充 |
| 兼務教員 | 姫野 順一、全　炳徳 |
| 顧問 | 土山 秀夫、黒澤　満 |

### 経緯

| | |
|---|---|
| ●2010 年 7 月 | 長崎大学平和構築研究センター（仮）設置検討委員会 |
| ●2011 年 7 月 | 長崎大学核兵器廃絶研究センター設置を答申 |
| ●2011 年 10 月 | 長崎大学核兵器廃絶研究センター設置準備委員会 |
| ●2012 年 4 月 | 同センター発足 |

## プログラム

13:00　挨拶　片峰 茂長崎大学長、中村 法道長崎県知事、田上 富久長崎市長

13:30　講演「核兵器廃絶研究センターへの期待」　土山 秀夫（元長崎大学長、核兵器廃絶研究センター顧問）

13:40　講演「センター設立の意義と抱負」　梅林 宏道（核兵器廃絶研究センター長）

14:25　国内外からのメッセージ紹介　（アンジェラ・ケイン国連軍縮問題高等代表など）

14:35　パネルディスカッション「長崎から、核兵器廃絶を考える」

パネリスト：田上 富久（長崎市長）

中村 桂子（核兵器廃絶研究センター准教授）

花房 吾早子（朝日新聞記者）

土屋 りみ（長崎大学医学部学生）

松岡 広明（長崎大学工学部学生）

進　　行：広瀬 訓（核兵器廃絶研究センター副センター長）

15:50　結びの言葉　調 漸（長崎大学理事・副学長）

16:00　閉会

# 長崎大学長挨拶

片峰　茂
長崎大学長

長崎大学は、被爆を体験した長崎医科大学を源流とする大学です。67 年前、一発の原子爆弾によって、900 名の医学生、教員、医療関係者が一瞬にして命を失いました。それ以降、全力をあげて取り組んできた原爆後障害研究、被爆者医療の中で蓄積された放射線健康リスクに関する知見や経験が、チェルノブイリ、あるいは昨年の福島の原子力発電所の事故という大災害に際して、大きな貢献を果たすことになりました。

一方で、被ばく大学の責務であるべき核兵器廃絶、核兵器のない世界実現に向けた本学の学術的取組は、これまで不十分なままでした。ところが、米国オバマ大統領のプラハ演説以降の新しい世界潮流と、被爆者の方々の高齢化という切迫感の中で、核兵器廃絶に向けての学術研究のコアを長崎大学の中に作ることを２年前に決断しました。その後、長崎県、長崎市、さらには土山秀夫元学長など多くの皆様のお知恵をお借りしながら、準備を進めてまいりました。少し時間はかかりましたが、梅林宏道博士という、日本の核兵器廃絶に向けたリーダーを長としてお迎えして、この4月1日に本センターを発足することができました。まさに長崎大学としての年来の悲願が実現したと考えています。

本センターは、エビデンスベースの核兵器学術情報、核兵器廃絶に向けた世界の動向等をデータベースとして長崎大学の図書館に構築し、英語と日本語で世界に発信します。また、そういった情報を分析し、核兵器廃絶に向けた政策提言を行います。

もう一つ、本センターは長崎の市民、地域のシンクタンクとして機能するという大きな役割を負っています。被ばく地長崎の市民の皆様とともに考え、学び、議論し、そして発信をする。そういう地域に開かれたシンクタンクとして、このセンターは大きな役割を果たします。

今後、本センターを先頭にし、長崎大学は人類の共通の夢実現に向けて尽力することをお約束して、ごあいさつといたします。

（かたみね　しげる）

# 長崎県知事挨拶

**中村 法道**
**長崎県知事**

「長崎大学核兵器廃絶研究センター開設記念シンポジウム」が盛大に開催されますことを心からお慶び申し上げますとともに、本シンポジウムの開催にご尽力いただきました長崎大学の片峰学長はじめ関係者の皆様方に深く敬意を表する次第でございます。

本県では、悲惨な被爆体験を持つ県民の責務として、「長崎を最後の被爆地に」と、これまで様々な機会を通して世界に訴えてまいりました。

国際社会においては、アメリカのオバマ大統領のプラハ演説により「核兵器のない世界」の実現に向けての核軍縮の機運が高まったものの、アメリカによる臨界前核実験及び北朝鮮の地下核実験など、依然として核兵器の大きな脅威が存在しております。

こうした状況の中、「核兵器廃絶」と銘打った研究センターが被爆地の大学に開設されましたことは、誠に意義深いことであり、本日のシンポジウムの開催は、被爆地長崎の核兵器廃絶への思いを発信する貴重な機会であると考えております。

2015年には、核軍縮と核不拡散の世界的な枠組みである核兵器不拡散条約（NPT）運用検討会議が開催されます。2010年の前回会議においては、最終文書が合意されるなど一定の成果があったものの、核兵器廃絶の道筋までは示されませんでした。

2015年の運用検討会議においては、その道筋が示されるよう国際的な世論を喚起する必要があり、本シンポジウムが長崎からのその第一歩になることを期待しております。

本県といたしましても、本研究センターでの研究成果にご期待申し上げるとともに、県民の願いである核兵器廃絶と世界恒久平和の実現に向けて、皆様方と手を携えて努力してまいる決意であります。

結びに、本シンポジウムが所期の目的を達せられ、実り多い成果を挙げられますよう祈念いたしますとともに、核兵器廃絶研究センターの限りないご発展をお祈り申し上げまして、ごあいさつといたします。

（なかむら　ほうどう）

代読：田中 桂之助 長崎県副知事

# 長崎市長挨拶

田上 富久
長崎市長

皆様、こんにちは。今日こうして長崎大学核兵器廃絶研究センターの開設を記念するシンポジウムを皆様方とともに迎えることができたことを大変うれしく思っています。センターの開設を決断された片峰学長にあらためて敬意を表したいと思います。

これまで長崎は、核兵器のない世界に向けて、さまざまな活動を展開してきました。被爆者の皆様は自らの体験を語り続けてきました。行政は行政として取り組み、そして大学は放射線が人体にどういう影響を及ぼすのか、研究を続けてデータを蓄積するというアカデミックな活動を続けてきました。このように、それぞれの立場で核兵器のない世界に向けて活動してきたという長い歴史があります。

私が参加して感じたことですが、NPT再検討会議などの会議においては、議論が国と国との軍事のバランスや国益などの視点になりがちであるということです。私はそこに人間の視点、人間の論理を持ち込み、核兵器が人間に何をするのか、人間にとって核兵器は何なのかという視点に引き戻す役目を負っていると考え臨んできました。被爆の実相や核兵器の非人道性について語ることは被爆地の役割である一方で、次の一歩を示す政策の提言などを行う機能については、まだまだ力が足りないと考えていました。今回、梅林様をセンター長に迎え、核兵器廃絶に関する研究センターが設立されたことで長崎からの発信力がこれまで以上に力を持つことになると期待しています。また、センターを基点に市民や、大学、行政、海外との連携を強め、被爆地長崎の願いでもある核兵器のない世界の実現に向けて、これまで以上に力強く皆様とともに進めていきたいと考えています。

今日は、長崎からの新しい発信の大きな一歩を踏み出した日であり、センターの誕生をみんなでお祝いする日です。あらためてセンターの開設にご尽力いただいた皆様に心から感謝を申し上げます。皆様と心を一つとして、核兵器のない世界の一日も早い訪れを祈念して、私のお祝いのごあいさつにさせていただきたいと思います。本日はおめでとうございます。

（たうえ　とみひさ）

講演
# 「核兵器廃絶研究センターへの期待」

土山 秀夫
元長崎大学長、核兵器廃絶研究センター顧問

今回、長崎大学に核兵器廃絶研究センターの設置を見るということを聞きましたとき、私は肩の荷が下りる気持ちがいたしました。と申しますのは、長崎市には鎌田定夫先生が1997年に私財をなげうって民間の平和研究所を設立しておられましたが、2010年には閉鎖のやむなきに至りました。閉所するに当たって、私は、今度は公共の平和研究所を設立することに努力したいと申し上げました。こうした希望を片峰長崎大学長が正面から受け止めてくださり、また、長崎県、長崎市からもご理解とご支援をいただけるということがわかりまして、大変喜んだ次第でございます。

ところで、このセンターには2つの特徴があると思います。

第1は、いろいろな核兵器廃絶に至る方法論を学術的な立場から検討し、これを発信し、また提言していく、そういう役割が一つでございます。

私は過去に日本学術会議の平和問題研究連絡委員会で6年間ほど委員を務めておりました。そこでは国内はもちろん、世界の国々の平和学に関する資料を集めて分析し、どういう平和研究所が必要かということを日本政府に提言いたしました。

その結果を見てもわかりますように、こういった研究所では、平和を乱す要因の一部分として核兵器についても触れるという程度のものでございまして、今回のセンターが核兵器廃絶の1点に絞って、アカデミックな立場から研究を行うというのは、おそらく世界で最初のことだと思います。

また、第2の特徴として、NGOとか市民への情報提供や助言を行うことが挙げられますが、このことにつきましては、既に長崎には一つのモデルケースがございます。ご承知のように、NGOと長崎県・市共催で過去4回の「核兵器廃絶—地球市民集会ナガサキ」という国際会議が持たれました。この集会における実行委員会の副委員長こそが、今回センター長になっていただく梅林先生でございました。また、中村准教授もこのシンポジウムにしばしば参加され、既に長崎市民の方々とは顔なじみになっておられますので、お互いの交流にはお二人とも何ら支障はないと思っております。

（つちやま　ひでお）

寄稿

# 「核兵器廃絶研究センターへの期待」

黒澤　満
日本軍縮学会会長
長崎大学核兵器廃絶研究センター顧問

大学における研究センターであるので、以下の四つの分野における研究が並行的に実施されることが期待される。第一は言うまでもなく、核兵器廃絶を規定する核兵器禁止条約(NWC)の研究である。国際 NGO によるモデル核兵器禁止条約やさまざまな提案がすでに存在しているので、それらを基礎にして、条約の内容のみならず、条約の作成をどのように行うのか、それに対するさまざまな障害をどのように克服していくのか、といった研究が期待される。また核兵器禁止条約とならんで、核兵器禁止枠組み条約の可能性、その長所と短所などの研究も重要であるように思われる。

第二は、人道的側面から核兵器を議論することが最近では一般的になってきており、国際人道法の観点からの研究もさまざま行われている。核兵器の使用は国際人道法に反するように思われるが、明確に禁止する国際法が存在しないので、1996 年の国際司法裁判所(ICJ) の勧告的意見などを参考にしつつ、核兵器使用禁止条約の交渉開始および締結に向けての研究が必要であるように思われる。

第三は、具体的な個々の核軍縮措置の研究であり、核兵器の一層の削減、包括的核実験禁止条約(CTBT) の発効、兵器用核分裂性物質生産禁止条約(FMCT)の交渉開始、非核兵器地帯の強化と新設、消極的安全保証の強化などの研究である。しかしこれまでのように、個別に単独で研究するのではなく、核兵器廃絶という枠組みの中で、核兵器廃絶という目的を意識しつつ個別の課題を検討することが必要であろう。

第四は、核兵器廃絶を実現するための背景の研究であり、核兵器は法的に違法であるというだけでなく、核兵器は反道徳的であり、核兵器は役に立たないし、持っていることで何らの価値をももたないという非正当化 (delegitimization) に向けての研究である。軍事的側面で核兵器の役割を低減することはオバマ大統領も主張しているが、政治的にも、道徳的にも、文化的にも核兵器は価値をもたないという方向にどう進めていくかという研究である。これらの四つは関連したものであり、並行して進めていくことが期待される。

研究成果の精力的な刊行を期待している。

（くろさわ　みつる）

急な事情で、当日は欠席されましたので寄稿をお願いしました。

講演

# 「センター設立の意義と抱負」

梅林 宏道
核兵器廃絶研究センター長

センターの仕事を自分の問題として考え始めたときに、2つの点に魅力を感じました。第1点は、核兵器廃絶という問題に特化した研究センターであるということ、もう1点は長崎という被ばくの歴史をもつコミュニティに奉仕するシンクタンクであろうとすることです。

まず、後者について述べます。私と長崎とのつながりの中心に、核兵器廃絶－地球市民集会の副実行委員長の一人として、海外ゲストを招く窓口となる仕事がありました。そのときに海外ゲスト招く意味について繰り返し考えました。研究者であれ活動家であれ、彼らを長崎に招くということは、違った活動文化との出会いを意味します。とりわけ欧米の活動の特徴の一つは、情報ベースでファクトを積み重ねて説得するという流儀です。それが長崎で永年つくられてきた核廃絶運動と出会い相乗的な化学反応を起こし、そこから新しいものが生まれるのだと私は考えました。

実はこのような相互の刺激の契機は集会のときではなくてもっと頻繁に、あるいは恒常的に要求されているのだと思います。コミュニティのシンクタンクとしてのセンターの機能というのは、まさにそういう恒常的な場を確保する機能だと思います。

次に、前者の核兵器廃絶に特化するという点についてです。核兵器廃絶に特化することに対して、私は2種類のリアクションに接しました。

一つは、核兵器廃絶という大事業に特化するということは、退路を断つような厳しいテーマ設定だという認識です。間違ってはいないと思いますが、少し肩に力が入りすぎている感じです。もう一つの反応は、核兵器廃絶は、日本においてはもう何十年来のテーマであるだけに常套句になっており、具体的にいったい何をするのかと疑問を呈する反応です。

この2つの反応には共通した一つの事柄が背景にあると思います。それは核兵器廃絶というテーマのライブな姿、日々新しい状況が生まれている姿が十分に伝わっていないということです。その結果、抽象的であったり、重すぎる課題であったりと映ってしまう。センターは核兵器廃絶問題に特化することによって、このようなライブな感覚を皆さんに伝える機能を担うことができると思います。

開かれたセンターにしたいと思います。ご協力とご支援をお願いいたします。

（うめばやし　ひろみち）

# 「長崎から、核兵器廃絶を考える」

進行：広瀬 訓
核兵器廃絶研究センター副センター長

5人の
パネリストのプロフィール

**田上 富久**
長崎市長

世界の小さな動きを長崎の人々にもわかるように伝えることが重要だと思います。

**広瀬**　進行役を務めさせていただく核兵器廃絶研究センターの広瀬です。今日は核兵器のない世界へ向けて、長崎からどういう発信をしてゆくか、特に学生を中心とした若い世代の方々の意見を聞きたいと思います。

**松岡**　長崎大学工学部3年の松岡広明です。コンピュータ関係を学びながら、学生サークル連合や東日本大震災のボランティア団体の代表もしています。長崎は、高校生は活発に活動しているのに、大学生はそうでもないと言われます。しかし、私も大学生協のPeace Now！というセミナーに関わったことがありますが、とても白熱しました。もっと学生を取り込んでゆくべきだと思います。

**土屋**　長崎大学医学部で放射線の人体への影響について学んでいる土屋りみです。愛知県で育ちましたが、両親は長崎出身で被爆3世です。私は、正しい知識や事実に基づき、一人一人が自分で平和について考えるような学生参加型の教育、学生が企画し、地域の人々と一緒に平和について、音楽や演劇、スポーツなど、様々な角度から考えるようなイベント、そして、全国また全世界への情報発信などができたらよいのではないかと考えています。

**花房**　朝日新聞長崎総局の花房吾早子です。長崎に来てまだ一年弱で、核兵器に関する取材を担当するようになってまだ間もないですが、それでも核の問題や、それを通しての世界とのつながりを感じるようになりました。しかし、距離も感じます。そこで、長崎の思いを具体的な政策論として、また、世界の小さな動きを長崎の人々にもわかるように伝えることが重要だと思います。それからやはり大学生の力を活用することは大切です。

**中村**　核兵器廃絶研究センター准教授の中村桂子です。私は核兵器廃絶に取り組む内外の様々な人々に出会ってきましたが、皆そのきっかけは長崎・広島です。それも、原爆の悲惨さだけでなく、そこから二度と悲劇を繰り返すまいと真剣に核兵器廃絶に取り組む人々の生き方に打たれたからだと言われます。被爆地からの発信はそれだけの重みがあります。理性と感性の両方を兼ね備えた発信をしなければいけないと考えています。

**田上市長**　私は、被爆の実相、事実をきちんと伝える、間違っていると思うことは間違っていると指摘する、

ネットワークを広げる、核の問題は世界全体の、現在と未来の問題だということを発信し続ける、そして核兵器の廃絶へ向けての、具体的な次の一歩を提示する、この5つをどうやって進めてゆくかが課題だと思っています。それから、長崎の平和祈念式典でも、司会は高校生ですし、子どもたちが重要な部分を担っています。それ以外でも、長崎は、長崎くんちもそうですが、様々な行事に若い世代を巻き込み、継承してゆくのが上手な街だと思います。若い人たちが、自分たちのやり方で活動してみるというのも良いと思います。

**松岡**　核兵器廃絶というと、やっぱりちょっと敷居が高い感じがします。Peace Now！で実施した被爆の遺構めぐりのようなフィールドワークのようなものなら取り組みやすいかもしれません。

**土屋**　私も敷居が高いと思っていましたが、学生に対する期待が大きいということも良くわかりました。

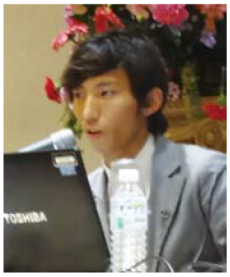
**田上市長**　平和を作るためには、いろいろな立場や文化、歴史、国の違いを乗り越えて力合わせるということが必要だと思います。長崎は、鎖国による中断はありましたが、そういう伝統が元々あるところだと思います。学生による国際交流は実際のところ、どんな状況ですか？

**松岡**　長崎大学も留学生は多いので、機会はあります。ただ、それを積極的に活用しようとする学生と、そうでもない学生がいるわけで、結局は一人一人の姿勢ですね。

**中村**　私もいろいろな国の出身者と接して、その国では核兵器をどのように考えているか、意見交換なんかできたら良いと思います。それから、大きな国際会議ですと、よくいろいろな国の学生が参加というか、見学に来ています。でも日本の学生は少ないですね。言葉の問題もあるかもしれませんが、残念です。

**広瀬**　国際機関でのインターンなども、機会はあっても、参加する日本の学生は少ないですね。また、長期の留学は難しくても、日本に来た留学生とルームシェアするなどの工夫をすれば、国際的な経験を積むことはできます。大学の教員には、そういう経験、ノウハウ、人脈を持っている人も多いですから、積極的に相談し、利用したら良いと思います。若い人たちに

**花房 吾早子**
朝日新聞記者。昨年5月に長崎総局に赴任し、主に県政を担当。
今年1月から原爆担当に移り、被爆者や核廃絶への取り組みなどを取材している。



**松岡 広明**
長崎大学工学部3年。北九州出身。現在コンピュータ関係を学んでいる。長崎大学および長崎県の学生サークル連合の会長であり、東日本大震災ボランティア団体の代表である。今年3月には学生22名を連れ支援を行っている。

**土屋 りみ**
長崎大学医学部４年。
両親が長崎出身で被爆三世。
本人は小学校から高校まで愛知県で過ごしたため、学校での平和教育はほとんど経験していない。チェルノブイリ等での調査に参加してきた。

**中村 桂子**
准教授。長崎大学核兵器廃絶研究センター

頼りにされて、うれしくない年長者はまずいないですよ。（笑）

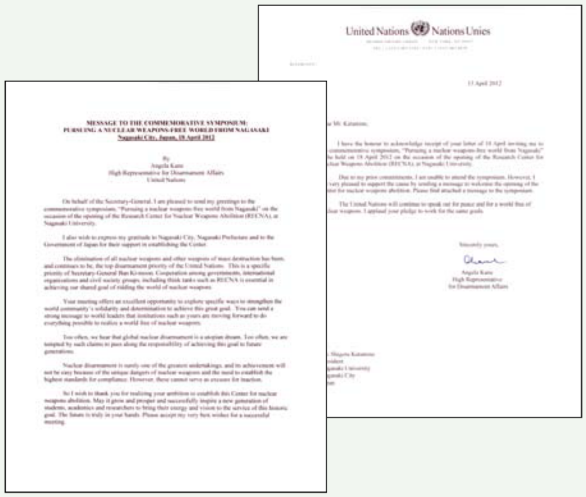
**田上市長**　やはり私は、「学生時代を長崎で過ごして良かった」と言ってもらえるような、長崎ならではの出会い、経験を、地元の人にも、余所から来た学生にも、留学生にもして欲しいんです。長崎大学も「やってみゅーデスク」とか留学生へのチューター制度とか、いろいろな取り組みをしていますね。学生の皆さんもぜひ長崎で有意義な大学時代を過ごして、「長崎で良かった」と言っていただきたいです。

**花房**　私もしばしば転勤がありますが、やはり一度自分が生活し、仕事をした土地は、離れてからも気にかかります。そういうちょっとした愛着が大切だと思います。すでに意識の高い学生は良いですが、そうではない学生は、いきなり核兵器のことを話題にしようとしても、たぶん気後れしてしまうのではないかと思います。まず小さなこと、身近なことから始めて、長崎のことが気にかかるようになる、そして被爆の歴史にたどり着く、みたいな自然な流れで関心を持つ人を増やしてゆくことが必要ではないでしょうか。一度関心を持ってもらえれば、仮にいつか長崎を離れることになっても、やはりそれはどこかで心に残るものだと思います。

**広瀬**　私もそういう一人一人の小さな気持ちを大切にしたいと思います。そして、いつかそれが集まって、世界を動かす力になるのではないかと思います。今日は皆さん、お忙しいところ、どうもありがとうございました。

# シンポジウム
## 「核兵器のない世界を目指して――長崎から世界へ」へのメッセージ

アンジェラ・ケイン
国際連合軍縮問題高等代表


United Nations Nations Unies

MESSAGE TO THE COMMEMORATIVE SYMPOSIUM:
PURSUING A NUCLEAR WEAPONS-FREE WORLD FROM NAGASAKI
Nagasaki City, Japan, 19 April 2012

By
Angela Kane
High Representative for Disarmament Affairs
United Nations

長崎大学核兵器廃絶研究センター（RECNA）開設記念シンポジウム「核兵器のない世界を目指して：長崎から世界へ」の開催にあたり、潘基文（パン・ギムン）国連事務総長に代わってお祝いの言葉を述べさせていただきます。あわせて、センター開設にご尽力された長崎県、長崎市、日本政府の関係者の皆さまにも感謝を申し上げます。

核兵器ならびにその他の大量破壊兵器の全廃は、国連にとって、これまでも、そして今後も引き続き、軍縮問題における最優先課題であります。この問題は、とりわけ潘基文国連事務総長が、自らの最優先課題と掲げているものです。世界から核兵器を全廃するという、私たちの共通目標を実現するためには、各国政府、国際機関、そしてRECNAのようなシンクタンクを含む市民社会の協力が欠かせません。

この大きな目標の達成に向け、国際社会の連帯と決意を強化する具体的方法を検討してゆく上で、本日のシンポジウムが貴重な機会となります。皆さんは、貴センターのような組織が、核兵器なき世界の実現に全力を傾注するべく立ち上がったという、力強いメッセージを世界の指導者に向けて発信することができるのです。

核軍縮は非現実的な夢物語に過ぎない、そういった言葉を私たちはしばしば耳にします。私たちは、そうした言葉にしばしば惑わされ、核兵器廃絶という目標を達成する責任を私たちの子や孫の世代に押し付けてしまいそうになります。

しかし核軍縮は私たち自身が取り組むべきもっとも重要な責務です。確かに、核軍縮に向かう道のりは平たんとは言えないでしょう。核兵器には特有の危険性がありますし、また、核軍縮を厳密に検証する制度を確立することは難しいからです。しかしだからといって、それらは行動を起こさない理由とはならないのです。

したがって、核兵器廃絶を掲げたセンターの開設という志を実現させた皆さんの努力に深く感謝申し上げます。貴センターが発展・飛躍し、次世代の学生、学者、研究者らが持てるエネルギーとビジョンをこの歴史的使命に注ぐような刺激となることを期待します。未来はまさに皆さんの手の中にあります。貴シンポジウムの成功を心よりお祈りし、お祝いの言葉とさせていただきます。

（翻訳：核兵器廃絶研究センター）

### 開設記念シンポジウムにメッセージ・祝電をお寄せいただいた方々

（敬称略）

- ■国連軍縮問題高等代表 アンジェラ・ケイン
- ■オーストラリア国立大学長、元オーストラリア外務大臣 ギャレス・エバンス
- ■駐日オーストラリア大使 ブルース・ミラー
- ■駐日メキシコ大使　クロド・ヘレル
- ■長崎大学客員教授、参議院議員 秋野公造
- ■参議院議員　大久保潔重
- ■副総理大臣、元外務大臣、衆議院議員 岡田克也
- ■元外務大臣、参議院議員　川口順子
- ■衆議院議員　櫛渕万里
- ■「核軍縮・不拡散議員連盟（PNND）・日本」会長、衆議院議員　河野太郎
- ■公明党核廃絶推進委員会事務局長、参議院議員　谷合正明
- ■衆議院議員　遠山清彦
- ■前法務大臣、PNND グローバル評議員、衆議院議員　平岡秀夫
- ■衆議院議員　福田衣里子
- ■参議院議員　藤末健三
- ■衆議院議員　宮島大典
- ■衆議院議員　山田正彦
- ■文部科学省高等教育局長　坂東久美子
- ■長崎県医師会長　蒔本 恭
- ■日本原水爆被害者団体協議会（被団協）

メッセージは
http://www.recna.nagasaki-u.ac.jp/
でご覧いただけます

# 開設記念シンポジウム以降、5月末までにRECNAが行った主な取り組みを紹介します。

## NPT 再検討会議準備委員会（ウィーン）をモニターしました。

RECNA の主要な取り組みの一つが、国際会議の現場からのライブな情報・分析の発信です。その第一弾として、RECNA は、4 月 30 日から 5 月 11 日にウィーン国際センター（オーストリア）で開催された、2015 年核不拡散条約（NPT）再検討会議第 1 回準備委員会を全期間モニターしました。実際に会議を傍聴した調漸理事、梅林宏道センター長、中村桂子センター員と、日本で支援体制をとった広瀬訓副センター長らが、2 週間の会議期間を通じて核軍縮・不拡散をめぐる最先端の国際議論をウォッチし、日々の動向やその分析を「RECNA・NPT ブログ」（http://recnanpt2012.wordpress.com/）で発信しました。国連関係者や各国政府代表、NGO らによる演説や報告書、提言等を引用した箇所には原文へのリンクを貼り、可能な範囲で日本語訳を行いました。また、ブログ発信と連動して、NPT 関連の基本文献を RECNA ウェブサイトの市民データベースに整備しました。

ブログ報告は準備号（第 0 報）から第 10 報まで 11 回にわたって行いました。第 0 報のタイトルに掲げた通り、そのモットーは「事実を正確に、ライブに、市民目線で」です。「核兵器のない世界」の実現に資することをめざした、日本語によるこうした国際会議の系統的分析は過去にもほとんど例がなく、画期的との評価もいただいています。ブログの読みやすさなどにいっそう工夫を重ねつつ、今後も<行動する研究所>RECNA を特徴付ける取り組みの一つとして、秋の国連総会第一委員会（ニューヨーク）や来年の第 2 回準備委員会（ジュネーブ）を視野に活動を続けてゆきます。

## PNND と NPT 報告会を共催しました。

5 月 17 日、RECNA は「核軍縮・不拡散議員連盟（PNND）」との共催で、NPT 再検討会議準備委員会の報告集会を衆議院第 2 議員会館（東京都千代田区）で行いました。PNND は、80 か国の 800 人以上を擁する核軍縮・不拡散に関心を持つ国会議員の世界的ネットワークです。その日本支部である PNND 日本には超党派の 56 名の国会議員が参加しています（2012 年 4 月 23 日現在）。

河野太郎衆議院議員（PNND 日本会長）による開会挨拶、田上富久長崎市長からのメッセージ（代読）に続き、中村センター員が準備委員会について、PNND 東アジアコーディネーターも務める梅林センター長が PNND 国際ネットワークのウィーンでの活動について、それぞれ報告を行いました。続いて、平岡秀夫衆議院議員（PNND 日本会長代行、PNND グローバル評議員）が PNND 日本の今後の活動を報告し、PNND 日本参加議員有志による超党派の「北東アジア非核兵器地帯促進ワーキングチーム」の創設といった新しい動きに参加者の注目が集まりました。最後に、調理事が閉会の挨拶を行いました。

当日参加した国家議員は超党派の 18 名（うち 5 名は代理出席）にのぼり、活発な質疑応答が行われました。また、メディア数社の他、首都圏の市民団体の関係者を中心に一般からも多く参加しました。今後も引き続き、RECNA は核軍縮に取り組む国内外の国会議員の活動に注目し、可能な支援を提供してゆく予定です。

## 核問題入門講座を行いました。

RECNA は核兵器の問題に主体的にかかわる若い層の育成にも力を入れています。大学生、高校生を含めた新しい人々との出会いを期待しつつ、5 月 31 日、「そうだったのか！！世界の核兵器～ NPT 再検討会議準備委員会報告会」を文教キャンパス内で開催しました。当日は、特別ゲストとして RECNA スタッフとともに準備委員会に参加した韓国人の金マリアさんを招き、ウィーンに集結した世界の若者の活動について報告いただきました。「核問題に関する素朴なギモン」に対し、金さん、調理事、広瀬副センター長、中村センター員がひとつひとつ丁寧に答えてゆく、というユニークな対話形式のセミナーには、高校生、大学生を含むおよそ 90 名が参加しました。終了後に回収されたアンケートの多くには、「私たちにもできることはある！」という同世代の若者に向けた金さんのメッセージへの共感と、今後の RECNA への期待が強く示されていました。

# ACCESS MAP
# 交通のご案内

**【交通アクセス】**

**長崎駅前から**

路面電車（赤迫行き）→「長崎大学前」下車

**長崎空港から**

県営バス（昭和町・浦上経由長崎方面行き）→「長大裏門前」下車

**【所在地】**

**長崎大学文教キャンパス内**

〒852-8521 長崎県長崎市文教町1-14


**長崎大学核兵器廃絶研究センター（RECNA）**

TEL: 095-819-2164　FAX: 095-819-2165

E-mail: recna@ml.nagasaki-u.ac.jp

http://www.recna.nagasaki-u.ac.jp/



2012年7月20日発行